（第３号様式）

会　議　要　旨

会議名	令和４度館山市青少年問題協議会
開催日	平成５年３月１６日（木）　午前１０時から
開催場所	館山市コミュニティセンター　１階　第１集会室
出席者	会長（市長）、委員１５名、事務局３名
公開・非公開の別	公開
非公開の場合の理由	
傍聴者	０　名

【会議概要・結果等】

１．開会

２．会長挨拶

皆様方におかれては、日頃より青少年の健全育成に多大なるご尽力を賜り、深く感謝申し上げる。

今日の社会は少子高齢化・経済格差の急伸、地域コミュニティの希薄化など課題も多く、子どもたちを取り巻く環境は厳しいものとなっている。

館山市においても、青少年健全育成のために多くの事業を実施しているが、この青少年問題協議会を通じ、皆様との連携を一層強化し、青少年が心身ともにたくましく、心豊かに成長できるようなまちづくりを進めてまいりたいと考えているので、どうか引き続き、ご支援、ご協力を賜るようお願い申し上げる。

本日の会議は、令和元年房総半島台風被害や新型コロナウイルス感染症の拡大があったことなどにより４年ぶりの開催となる。館山市が令和４年度に実施した事業の報告と館山市教育支援センター所長　羽山様を講師に迎え、「学校をとりまく生徒指導上の諸課題」についてお話を頂く。その後、皆様方の活動や課題などについて、意見交換を行い、館山市の青少年健全育成の更なる発展を目指して、実り多い会議にしたいと存じますので、忌憚のないご意見をお願いしたい。

３．自己紹介

４．議事

（１）副会長選出について

（２）令和４年度館山市青少年健全育成関連事業の報告

・事務局（生涯学習課）より令和４年度に実施、また、実施予定の事業概要について説明を行った。また、青少年を対象とした各種ソフト事業について、その多くを教育委員会が実施していることから、教育委員会各課が実施する事業報告が中心となっているが、青少年健全育成に関しては、福祉部局等も含め全庁的に対応している旨、併せて説明を行った。

●教育総務課事業

・いじめ相談室や教育支援センターの運営、児童生徒の心理アンケート実施等により、いじめや不登校の防止に努めるとともに、増加傾向にある特別な支援が必要な児童をサポート

する体制をとっている。
・事業実施の効果としては、学校では相談しにくい相談が出来る場所の確保、不登校児童の学校復帰への支援、外見ではキャッチできない児童の心の悩みを、アンケートにより実態把握できること、より充実した特別支援教育が実施できることなどが挙げられる。

●スポーツ課事業
・同世代または世代を超えて交流しながら、スポーツ活動を行う機会を提供している。
・身につけられるものや効果としては、心と体の健康、仲間と協力し合い目標に向かって努力する精神が育まれること、海辺で行うスポーツを通じて自然や環境を愛する心が育つこと、一流選手から学ぶことによって意識改革が図られ、さらに研究・努力しようとする心が育つこと､厳しい練習を通じて困難に打ち勝つ精神が鍛えられることなどが挙げられる。

●博物館・図書館事業
・地域について学ぶこと及び親子で絵本の読み聞かせやお話を楽しむ機会を提供している。
・身につけられるものや効果としては、地域のことを知り、郷土に愛着を持つきっかけづくりにつながること、使う言葉を磨き、想像力を高め、豊かな心が育まれることなどが挙げられる。

●中央公民館事業
・子ども達が幅広い世代と交流しながら、様々な体験をする機会を提供している。
・身につけられるものや効果としては、我慢強さ、独創性、社会性、豊かな情操、科学的想像力、家族の絆が深まること、ものづくり、保護者の育児の悩みの解消・保護者の孤立防止・子育て知識の習得、いじめや登校拒否の防止などが挙げられる。

●生涯学習課事業
・市内各小学校区の地域の皆さん、昭和女子大学の学生、ＩＴ関連企業や通信事業者団体の皆さんが実施してくれる様々な体験イベントや教室、そして、青少年相談員や子ども会役員などの見守りのもとで、他地域の子どもや保護者と一緒に行うスポーツや遊び、ジュニアリーダー研修に参加する機会を提供している。
・身につけられるものや効果としては、他地域の子ども達と仲良くなること、競い合う心、コミュニケーション能力、観察力、家族の絆、友達と一緒に遊ぶことの楽しさを知ること、考える力、リーダーシップ、他者を思いやる心、国際感覚、異文化体験、外国への興味などが挙げられる。

（３）講演『学校をとりまく生徒指導上の諸課題』
（講師：館山市教育支援センター　所長　羽山　稔彦氏）
・保護司として、青少年の事件・犯罪があり、その子の更正のために月２回面接をしていくなかで、本人が幼児期、小学校期、中学校期、高校生期の学校在学中の責任が大きいと痛感した。
・館山市教育支援センターはいじめの相談、不登校の相談、来所し、実際に勉強を教えたり、ゲームや運動等のレクリエーションをしたり、コミュニケーションの力を少しでもつけてあげられればと、所員４名が学校にいけない子どもたちの最後の砦という意識を持って接している。
・いじめについては、各学校が非常に丁寧に対応しているので、いじめ相談にかかってくることはごく少数である。実際、この１年間も５件を下回っている。それだけ、各学校が丁

寧に対応していると、元教員として自負がある。
・今回は、２つの柱で話をさせていただく。１つは文部科学省調査の千葉県版、もう１つは市内小中学校長にアンケートをしたなかから浮き彫りになった課題、それらのまとめで話をさせていただく。
・まず、第１の柱である令和３年度文部科学省調査は、毎年文科省が実施しており、それを千葉県でまとめているものである。
・内容としては、暴力行為、いじめ、不登校である。調査が年間であるので、その結果が翌年の１０月に発表される。そのため、今回のデータは前年度のものであることをご了解いただきたい。
・国や県は公開をしているが、各市町は非公開のため、県のみの掲載ということをご了承いただきたい。しかしながら、館山市もおおむね県と同様の傾向であるということで見ていただければと思う。
・暴力行為は、中学校が１０年前は大きな割合を占めていたが、減ってきた。しかしながら、小学校の増え様がすごいという点を見ていただきたい。令和３年度はコロナの影響か４,０６４件と激増している。
・暴力行為の内容としては、小学校では児童間の暴力行為が激増している。しかしながら、令和２年度が落ちているので、コロナの影響ということが推測できる。
・中学校においても、生徒間暴力があるが減少傾向にあった。しかしながら、令和２年度は少なかったものの、令和３年度が増えているのはコロナの影響かと思われる。
・いじめの認知件数は、中学校においては、大体一定した件数ではあるが、小学校が大変増えている。
・小学校１年生～中学校３年生の学年別の認知件数については、４年間のなかで、令和３年度が突出して増えていることがわかる。やはりコロナの影響であることが推察される。
・小学校のいじめの態様はひやかしやからかい、悪口が圧倒的に多い。そして仲間はずれや集団による無視、軽くぶつかられる、叩かれるというもの。
・中学校においてもある程度は同様で、ひやかしやからかいが５０％、仲間はずれや無視、軽くぶつかられる、叩かれるといういじめの内容が顕著に多い。
・いじめの相談を誰にしているかについては、学級担任あるいは学級担任以外の教職員という、学校職員に対しての相談が多い。元校長としては、学校の職員を頼ってくれるということに安堵している。そして、保護者や家族、友人となっている。
・しかしながら、誰にも相談できないという数が２.４％ではあるが、実際にあるということをある意味では危険視しなければならない。
・いじめ発見のきっかけは、学級担任が１０％程度だが、１番多いのはアンケート調査である。各学校のアンケート調査の効果や有効性がわかる。本人からの訴えは中学校で２０％程度である。
・不登校については、中学校までは学年が上がるごとに増加をしており、特に中学校で激増している。そしてコロナ禍で増加が顕著である。
・不登校児童の欠席状況については、欠席が３０日～８９日と欠席９０日以上の児童が合せて９０％を占めている。また、まったく学校にいけない児童が３％いる。中学校においても同様の傾向があり、特に欠席が９０日以上の生徒が６０％おり、小学生よりも欠席日数が増えているという状況がある。
・不登校のきっかけと考えられる状況としては、１つは本人の問題というくくりで、無気力やなんとなく行きたくない、という児童が小学校では６０％いる。そして家庭内の問題、生活リズムの乱れがある。

いじめについては、１％の児童の学校にいけない原因となっている。
・いじめが原因で学校に行かない児童が多いのではないかと思っている人が多いと思われるが、少なかったという結果となった。中学校についても同様である。中学校は、いじめを除く友人関係が顕著である。いじめについても中学校においてもわずかであった。
・不登校の相談をどの様にしているかは、１つめは教育支援センター、適応指導教室、あるいは教育委員会が主管している上記の機関ではないものが相談機関となっている。学校外の機関での相談、指導がないことが１番問題である。館山市教育支援センターには、実際には申請件数が年間２１件あったが、保護者が連れてこなければなかなか通えないことが実態としてある。申請はしたものの、通えないというお子さんも実際にはいる。相談、指導のできない６０％が１つの課題である。
・中学校においても同様である。中学校では、相談、指導ができないという生徒が７０％いることが実態としてある。そのようなことを市内の子どもたちに対してどう対応したらよいかが１つの課題として浮き彫りになっている。
・２つ目の柱は、市内の小中学校の校長先生にアンケートをとったものをまとめたものである。内容としては、暴力的行為、いじめ的行為、長欠、不登校、校長から見たコロナの影響、その他という内容で話をすすめる。
・暴力的行為は、低学年は気持ちを伝えられず叩く、蹴る、自分の意に沿わないと感情的になる、興奮して友達に手が出る、担任からの指導にいらつき暴力をふるう、というものがある。小学校の担任や管理職をやったことがある自分にとって、低学年が担任からの指導に反発心が生まれて暴力行為になっているというところが、気にかかる部分である。低学年ならではかと思うが、授業中の徘徊、ほかの児童にちょっかいを出す、ということがアンケートで回答があった。
・中学年は、言い争いが発展し叩く、蹴る、勘違いでカッとなってパンチ、その時の気分やわかってもらえないという不満等の情緒障害により教員や他人に暴力をする、担任に対しての暴言や軽微な暴力がある。
・高学年になると、「死ね」「消えろ」「うざい」等の暴力的言動、「うるせえ」「はあ」という挑発行為がある。その時代のテレビ番組の影響も大きいのかと思う。他には押す、小突く、肩ぶつけ、蹴る、高学年になってくるとイライラを理由にトイレの壁や教室内の物品の損壊が増えてくる。そして担任に指導されたことに腹を立て、隠れたところで物品の損壊がある。ある意味では知恵をもってそのような行為をしている。
・中学生になると増えているのは「死ね」「うざい」といった暴力的言動である。そして、ふざけの延長で相手を担ぎ落してけがを負わせた。ふざけの部分がどうなのか、ということがその校長からはクエスチョンがついていた。どこからがふざけでどこからが本気なのか、というところも難しいところである。また、口論から相手にパンチということが暴力的行動の中にはあった。
・いじめ的行為は、低学年は、気に食わないからという理由で机の中に死ねというメモを入れる、その児童のノートに死ねと落書きをする、休み時間に背後から鉛筆で突っつくということがある。
・中学年、高学年は、ある程度同様のものである。悪口、陰口、からかい、複数人で無視、ばい菌扱いをする、相手の物品にいたずらをすることである。そして始まるのが、LINE や SNS での悪口、うわさの記載、また、SNS 上にあげた動画や画像を仲間に拡散するということが、高学年になると出てくる。
・中学生になると、さらに発展し、「死ね」「消えろ」「うざい」などの言動的行為、陰湿な複数人で個人を無視する、さらに LINE や SNS への記載、動画や画像を仲間に拡散がある。

・いじめ的行為の指導が難しいケースとして、記載した校長もいた。非常によくわかると思う。内容はじゃれあい、プロレスごっこ等、子どもたちの中ではじゃれている、遊んでいるだけと、いじめの認識はないけれども、このような行為が日常生活の中で増えていくとトラブルになることや、まだトラブルとして露見されないことが問題である。
・発達障害から生まれてくるトラブルもある。やはり１番はコミュニケーションをとる方法を知らないことである。幼児期や低学年からの積み重ねの中で、コミュニケーションをとる力が、今、不足している。ここで怖いのが、発達障害ということでくくってしまうことである。本人にとっても切なさ、困難さ、自分の居場所がない不安感を持っているので、それらをいかにして丁寧に周囲の大人たちが気遣ってあげられるかが大事になってくる。
・LINE、SNS、ゲーム間でのトラブルについては、先ほど言った悪口やうわさの記載や動画の拡散の他に、保護者の知らない間にオンラインゲームで課金をし、それが明らかになったときには、何千円、何万円となり、何らかの対応をしなければならなくなったということが結構数的にあった。他に LINE グループを作ってアニメ画像を共有するという法律違反、他人になりすましてアカウントを使ったゲーム内の盗難、LINE の発信したメッセージの反応に対して神経質になり、既読にならない、返信がこないとなると夜遅くまで眠れないようなことがある。
・指導の難しさとしては、家庭のできごとで発覚したときには重大案件になっていることや、情報をくれた家庭があっても、「うちからの情報は伏せてください」と個別指導には至らずに全体指導にとどまり、有効な指導には至っていないことがある。そのように感じている教職員も多いのではないかと思う。
・学校外のオンラインゲーム仲間との課金のやりとりもある。課金は別として、自分の在籍する学校の友達ではなく、広く校外に友人を作る、あるいはゲームの仲間を求めているということがある。素直な子はしゃべってくれるが、今の小学生、中学生は学校内の生徒同士ではなく、オンライン上の仲間付き合いが普通になっているということがわかる。
・１番厳しいのが、教員よりも生徒の方が機器の扱いに詳しいという問題である。
・長欠、不登校の問題は、小中学校ともに増加傾向である。特に小学校低学年での登校しぶりが増加している。これはコロナの影響ではないかと思われる。
・今、教育支援センターに申請や通所をする児童の傾向が、まったく前年度とは変わった。小学校３、４年生が非常に見学に来る。つまり３、４年生で学校に行かない、行けない児童が増えてきているということが推察される。これは３年間のコロナの悪影響がそのようなところに露見しているのではないかと感じる。
・集団生活の不適応については、コミュニケーションにも類するかと思うが、人とコミュニケーションをとるのがわずらわしい、あるいは教室の中の人がたてる音が非常に耳障りである、ということが理由で学校にいけないという相談をする過程が増えている。ある意味では、集団生活になじめないという子が増えているのではないかと推測する。
・兄弟での不登校もある。兄が学校に行っていなくて、弟が「なんで行かなければいけないの」と傾向としては当然そうなってくる。家で何をしているかといえば、兄弟でゲームをしている。小学校段階ではまだ昼夜逆転には至らないが、中学生になると昼夜逆転になる。
・学習の理解力不十分による登校しぶりは、そのようなお子さんが増えていると感じている。
・適応障害、起立性調節障害の診断を受けて、学校に行けなくなっているという児童、生徒も増えている。
・コロナに特化した見方をすると、集団活動や話し合い活動が制限されたことによって、コミュニケーション力が低下した。また、自己中心的な行動、言動が多くなり、それがトラブルになっている。暴力や徘徊が増加し、集団の中に入れない児童、生徒の増加が顕著で

ある。
・自由な時間ができたために、外に出られない期間もあり、ゲームをする時間が増えてしまった。自ずと易きに流れて生活リズムの乱れができ、遅刻し、行っても学校の中での存在感や居場所がないので、不登校に陥ってしまうという負の連鎖がある。
・体力、運動能力も低下した。マスクにより、教師も子どもも表現力が低下した。目は口ほどにものを言うが、やはり顔全体の表情があらわせないということが、子どもたちに対する指導の難しさ、子どもたちが感じるものの不確かさがあったのではないかと言っていた校長も多数いた。
・家庭と学校の連携の難しさは観点が変わる。１つ目は時代の流れの中で、保護者がわが子中心に判断をするようになった。例えば、学校で起きたことを子どもが親に伝えるとき、当然子どもは自分を保身しているので、良いように言う。しかし、裏には別のことが理由でのトラブルや課題があるが、わが子が言っていることがすべてと、わが子中心に判断をしてトラブルになってしまう。
・２つ目は家庭の教育力の低さである。忘れ物が多い、宿題忘れ、早寝早起きができない、挨拶をしない子が増えている。
・３つ目は指導がスムーズに入っていかないことである。例えば、宿題忘れを担任が指導し、それが原因で登校しぶりを起こした場合、親が担任を批判する。
・４つ目は保護者が若い教員を年下として見下すことである。今、小学校、中学校ともに若い先生が採用されている。当然、自分自身の子どもを育てた経験はない。そのような中で、保護者がそのような職員を見下すようなことが顕著にみられるということもあった。
・５つ目は現職時代から思っていることだが、集団生活が苦手、集団で同じ行動を起こすことが苦手という児童、生徒が本当に多くなっている。
・６つ目は発達に課題のある児童、生徒の増加である。
・不登校にポイントを置くが、どんな生徒指導上の課題があっても、本人よりも親が困って苦労している。ましてや今、母親が子どもにずっとついていられるわけではなく、仕事をしている。子どもが学校に行けないと、仕事を休まなければならない、不安ながらも仕事に行かなければならない。そのような中で、母親が１人で悩んでいるケースが相談に来ることが増えている。
・そのような場合、父親が「そうなってしまったのはお前の育て方が悪い」と投げかけていることが多い。不登校についていえば、「旦那さんはどんな考えで子どもに対してどう接しているのか」と聞いたときに、理解を示し「一緒にやっていこう」という夫婦は、子どもたちはどんどん変わっていく。しかし、先ほどの母親、妻任せの家庭は、子どもは脱出することができない。やはり、夫婦、両親の協力が必要だと痛感する。我々も学校も、親の相談を受ける体制をさらに整えていく必要があると感じる。
・学校では対処できない事案が増えている。学校は人員、時間に限界があるので、個別対応が難しい。その部分で行政やその他との連携が必要だと思う。
・学生時代の不登校者がひきこもりとなる確率が高いと、様々な報道の中でも言われている。８０５０問題という言葉がある。実際に２０年以上ひきこもっていた方がいた。親が亡くなったときに、初めて外に出なくてはいけないという生活に変化した。そのときに、地区の青年団が子ども会の夏休みの活動に誘ったところ、非常に気概をもってやってくれた。そこから地域に合流した。８０５０問題という８０歳の親が５０歳の子の面倒を見なくてはならないという問題が多くあるということは、何とかしていかなければならない。
・市から見ても貴重な納税者が減り、生活保護を必要とする人になる可能性がある。そのような人たちを１人でも救い、社会でも貢献できる人になれるよう、周囲の大人たちがして

あげられればと思う。これは個人の問題ではなく、館山市の未来の問題だと思う。そのためには、色々なところで当事者やその保護者が「ヘルプ」「助けて」を言える環境づくりが必要である。そして多くの大人たちによるサポート体制が必要である。

・学校にはスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、訪問相談担当教員が必要に応じて派遣や配置をされる。そのような人たちの活用もできるということを広く広報していただき、近所にいた場合や相談を受けた場合には、学校に頼ってもいいということをお口添え願えればと思う。それには、行政や各種団体、ボランティアの支援が必要であり、どうしていったらいいかということを考えていかなければいけない時代である。

（委員）センターに申請があって相談が開始すると言っていたが、親から申請するのか、親子で申請するのか。

（羽山氏回答）手順としては、学校から教育支援センターという機関があるというお誘いを保護者にする。まずは電話で相談を受け、そして１回見に来てくださいと親だけ、または親子で見に来る場合もある。実際に見学や説明をし、体験をしてもらい、来る来ないを決める。申請が先ではなく、体験が先が良いと思う。

（委員）学校でのいじめの相談は、学級担任がすることが多いという話があった。担任のこれに対応する勉強会や講習会等の路線というのは決まっているのか。

（羽山氏回答）大津の事件があり、日本のいじめに対する考え方はがらっと変わったと思っている。行政もしかり、学校の管理職もしかり、いじめに対してはあってはならないことだというしっかりとしたポリシーができているので、各学校はいじめに対する研修というよりも、考え方をしっかりと汲みなさい、アンテナをしっかり上げなさい、そして子どもたちの中に入り、そのような情報をキャッチしたら速やかに対応しろ、ということを非常に学校という組織の中で磨かれている。もしもそのようなことがあれば、１担任だけの判断ではなく、皆で共有しなさい、そして複数の職員で対応しなさい、という危機感はある。

（委員）まずは、いじめの状況等の現場を知って、それをまた新たな機関に持って行って、皆で対応するということか。

（羽山氏回答）はい。

（委員）小学校も中学校も教育相談アンケートを学期に１回、いじめだけではなく、色々な相談事をアンケートとしてとる。それによって、いじめも発覚でき、教育相談という形で、生徒１人１人に面接をする時間を設けている。他には、担任だけではなく、相談したい先生を選んで教育相談を受けることもできる。そのような中でいじめが発覚した場合には、中学校でいうと、週１回、生徒指導委員会というものがあり、各学年から問題行動やいじめ相談でこういうものがあったと皆で共有する。共有したらそれだけではなく、いじめ認知として、毎週、今の状態はどうなっているか、その子のいじめの問題はなくなったのか等、皆で相談し合い、話し合い、状態を共通理解しながらその子の面倒を見ながら、様子をうかがっている。また、アンケートでもあったが、不登校の児童、生徒が多くなったと感じる。やはりコロナの影響もあり、不登校の子が学校にいるだけで、友達がそうだから自分も、という子も少し出てきているように思う。そのような子は、各関係機関に相談させていただき、学校だけでなく、地域の方や機関に相談してやっていければありがたいと思う。

（委員）今あったように教育委員会と学校の関係も、生徒指導委員会や不登校対策会議を学校が開いたときに、中学校の方には市の指導主事が直接学校に行って、その場で一緒に会

話に加わる。状況を把握したり、アドバイスしたりする。小学校においては、全部行ければいいが、要請があれば行く。どうしても中学校の方が、生徒指導上の問題や不登校の問題が数的には多いため、そのような形で入っている。やはり、羽山氏の話を伺い共感したのが、コロナというものがとても大きく影響しているということである。特に、先ほどの低学年や３、４年生がかなり登校しぶりになっているということである。なぜかというと、本来の修学旅行や運動会、体育祭、部活動等、ありとあらゆるものに制限がかかっていたので、仲間と一緒に行動する、体験する、会話するというのか減ってくるため、じっと自分の中にいるので、会話の中で「俺つまんないよ」とか「死にたいよ」という言葉が出てくる。これは大人の社会にもあるようで、今、閉鎖的に圧迫されているので、このままいったらなにも面白いことないとか、死にたいとか、館山市だけではなくて全国的に出てきているので、心配をしている。これで少しずつコロナが快方になり、良い形で色々な行事ができるようになってくれば、また違うようになると思う。また、指導している先生方も、必要最低限のことしかできていない。例えば、教育談義をするということは、まったくできなかった。そのようなことは、意外と必要なことであり、互いにアドバイスし合って、勉強になる機会も最低限に絞られてきていた。コロナによる影響が大きいと、つくづく感じている。

（委員）コロナの影響は確かに高校でもある。色々な行事が円滑にできなくなったり、コミュニケーションがとれなかったりということが、非常に大きかったと感じている。先だっての卒業式で、３年生たちが入学して初めて全校で校歌を歌ったような状況だった。どこの高校もきっとそうだったと思う。そんなところからも、あって当然のものがなくなった、そのとおりにできなかったということで、苦労した時期でもあった。話は変わるが、小学校、中学校、高校の連携というと、この地域は非常に色々な面で連携がとれているのではないかと思う。中学校の先生方と高校で生徒指導連絡協議会というものを作ったり、あるいは警察の方にも協力を頂き、学校警察連絡協議会、通称学警連という組織を作り、祭礼の巡回指導等を小中の先生と高校の先生が一緒になってやったり、ちょうどこの時期は中学校から高校に子どもたちを迎え入れる時期になるので、様々な中学校の先生方が持っている情報を、高校に引き継ぎ、円滑に接続していくような形をとらせていただいているという点からすると、この地域は非常に円滑な協力体制、連携ができているのではないかと、ありがたく思う。

（委員）中学校の PTA 会長をしているが、確かに学校行事等がほとんどなかったような年だったので、触れ合うということもそんなにはなかった。この間、卒業式に出席させていただき、生徒の答辞の中で、本音を言えばもっと給食のときに会話がしたかったとか、バザーをやりたかったとか、色々子どもたちがすごい負担を抱えて生活をしていることがわかった。先ほど、資料の中にもあったが、不登校になるきっかけのところで、いじめと不登校を切り離して考えた方がいいと感じた。５月に制限が解除される予定であり、これからは少しずつ元に戻っていくだろうが、コロナが収まるわけではないので、それに合った指導が必要になってくるのではないかと感じる。個人的な意見として、子どもたちが先生たちをあまり偉い人と見ていないところがあるのかと思うところがある。私たちの時代は、殴られるようなこともあったので、怖いと感じることもあったが、今はそのような指導ができないので、先生方にも大変負担になっているのではないかと思う。暴力をしてくれということではないが、何かしらそれに見合ったような指導方法を見つけていただき、学校の中でのいじめということは私の耳には入ってこないが、不登校は聞くので、その子たちが大人になり、反対に子どもをもったときに、少し不安に感じる。

（委員）１番、私どもの部署として思ったことは、不登校が大人になったときにひきこもりになるということである。ひきこもりの対策もやっているが、それが非常に興味深いことだった。また、不登校になる原因として、必ずしもいじめが原因となるわけではないという資料があった。それも、我々が考えていなかったことであり、イメージが変わった。いじめによって不登校になるというイメージが今まであったため、全然違うのだと、非常に参考になり、目から鱗だった。逆に言うと、不登校になる原因というのは様々であるということを非常に感じた。先ほどの話にもあったが、最近増えているということを聞いたので、これに対する対策も非常に重要であると実感した。

（委員）就学前の子どもに関わることが多く、コロナ前は「どんぐり」という子育てサロンを開催していた。学校に行く前の親子と問題を共有し、遊ばせながら話を聞くことをしていたが、今はコロナの影響で開催できておらず、今後も開催する見込みが立っていない。問題に関することを直接親子から聞くことはできていないが、個人的には長いこと保育園に携わっており、そこから感じることは先ほどの話の中にあった、親の問題というのである。不登校になった子どもが家庭でゲームをやっている等、家庭の教育力の低さを聞いたときに、親を育てていく機関が今足りていないと思う。子育て支援の中で、長時間保育や土日の保育に市でも力を入れていると思うが、子どもの側からすると、どんどん家の中で過ごす時間が減ってしまい、預けられる時間が長くなってしまう。それが子育て支援につながっているのかは、個人的には疑問に思っている。家庭が子どもを育てる力をもっと育てていかないと、親を育てていかないと、親子関係の中から子どもが育っていくことができないと個人的には感じている。

（会長）先日、ある議員から子どもをもっと預かってほしい、長時間預かれるような仕組みを作ってほしい話もあったが、教育委員会からの話では、親と子どもの絆もあり、一緒にいる時間を増やしてあげることも大事ではないか、という話もあった。

（羽山氏）先ほど委員からの話にも頷く部分が大きい。やはり家庭が子どもを育てていくという１つの大きな責任をもつ。そのために、どんな行政的な、地域的なサポートを作っていけるのかが大切である。

（４）意見交換会

（委員）いじめについて、館山市内の小学校を中心に人権教室をやっている。３、４年生は確かにコロナの影響があると思う。ちょうど変わり目のコロナのときに１年生にあがり、中学１年生のときにコロナのときにぶつかった人が今、中学３年生になっている。人権擁護委員としては、いじめについて３、４年生を主体に行っている。館山市の人権擁護委員が１０名いるが、館山市自体の学校数が多いために全部の学校をまわりきれないことが何年もの問題になっている。ひきこもりの件では、昨年の９月にひきこもりの NPO を立ち上げた。やはり８０５０問題が今、９０６０問題くらいまでになっている。中学生の親も来たが、年齢層の低い中学生、小学生の家族がそういう場にきてほしい。月に１回、家族会を開いているが、８０５０、９０６０くらいになると、３０年もひきこもっている人もいる。南房総市で百数人のひきこもりの方がいるので、それがだんだんコロナで増えており、年齢層が低くなっていることに気が付いた。館山市や南房総市は閉鎖的でなかなか自分の家のことや自分の子どもがそうであることをかなり隠していたが、今は人数的には増えてきた。中学生の親は、６年生から中学１年生にあがるときに先輩とのコミュニケーシ

ョンがうまくできず、結局１年生の途中から学校に行けなくなり、小学校６年生までは何もかもできる子だったので親としても対応ができなくなってしまった。市でもそういう家族の方に声掛けをしてほしい。実際、ひきこもりの方は病院に行くのも嫌がるが、全然知らない人が話を聞いてくれるとなると来ることができる場合もある。ひきこもりの場合は良い家族のはずなのに、なぜこうなってしまったのだろうとなる。コロナの影響もあるが、ひきこもりの年齢層が低くなっているので、NPO を立ち上げたので、市でも相談に来たらよろしくお願いしたい。

（会長）今回は担当の生涯学習課だが、テーマによっては担当する課を呼ぶ等対応したい。

（事務局）社会福祉課等の担当課もあるので、議事録の情報提供をして、担当課につなげていきたい。

（委員）親が子どもに対して、あまり見ていないように感じる。青少年相談員をやっていたときに子どもたちにバスケットボールを教えていた。大会や練習試合に行くときは、必ずその親が来ており、親子で行動をしていた。今は親は見に来ないでください、祖父母はなおさら来ないでください、というような形になっていると聞いている。青少年相談員の「親子写生大会」は当時もやっていたが、このような親子で行動する行事に出ることで、子どもの友達同士の親も友達同士になり、周りの親が自分の子どもを見てくれることは良いことである。なぜこのようなことを言うかというと、窃盗や傷害等、警察の連絡があったときに親が初めて自分の子どものことをわかるというのは、普段から子どものことを見ていないということではないかと思う。

（委員）スポーツ少年団活動は保護者も一体で成り立つ活動であると思っている。小学生のバレーボールは館山小学校の児童を母体で作ったチームだが、色々な学校の子どもが参加をしている。夜間や休日に実施するので、保護者の送迎もある。ただ、話があったように、試合は復活し始めたが、コロナの関係で入場制限や体育館の人数制限もあり、撮影禁止であり選手、スタッフしか入ることができない。保護者は写真も見れない、ビデオも見れない中、いってらっしゃいしかできないというのが、コロナ禍における大会のあり方だった。試合に行く前に出欠をとるということが、三十数年間やっているがコロナ禍になって初めてあったことである。そのときに入部した子や保護者は「保護者は行かなくてもいいんだ」、「応援したい」ではなく「行ってはいけない」で入ってしまった。３月にあった大会は入場制限がなく、応援に来てくださいと言ったら「行ってもいいんですか」と埼玉県から祖母が応援に来たこともあった。コロナ禍のいじめや不登校というのは、今言ったような現場もあり、あったんだろうと思う。戻ってきたときに、皆が応援に来て、昔のようなアットホームな大会ができることを期待している。

（委員）自分が生徒の頃から陸上競技に携わっており、今から２０年ほど前、学校現場から教育行政にでるときに、自分の先輩も教育行政に出た。この機会に陸上競技で子どもたちを育てていく事業をやろうと、小学生対象の「ジュニア陸上教室」を始めた。この３年くらいはコロナで実施できていない。最初は６０人くらいだったが、この中から胸に日の丸をつけて国際大会に出るような子どもが１人でも育ってほしいという思いで始めた。だんだんと人気の事業になり、２００人を超えるところまでなった。スタッフも高齢化し、数も足りなかったが、増えてくると色々な子どもが出てきた。陸上をやりに来ているのか、家で何か困っていて参加させられているのか、という子どもは多くはないがいた。少し目

を離すとけんかを始めたり、思いどおりのことができないと泣きわめいたりした。そのような子どもが来るとわかるので、そのグループには多めにスタッフをつけ、その子とほかの子がトラブルにならないように気を付けていたが、このようなやらなければならないことも、自分たちにできることの１つなのだと割り切って進めてきた。陸上競技という狭い中だが、問題に対して対処するのではなく、地域で子どもたちを育てていこうという攻めの活動、地域の子どもは地域で育てていこうという取り組みが行われるようになると良いと考えている。そのためには、教育支援センターや家庭、学校、地域等、様々なところとの連携をしてく中で、人的に増やしていかないと難しいと考えている。それぞれの分野ややり方で、地域の子どもたちを育てていくという視点で、ささやかだが取り組んでいけたらと考えている。

（委員）小学３年生の子がおり、３年生の登校しぶりという話を聞いて衝撃的だった。割と言うことを聞く方だが、他の保護者の話を聞くと、１日中ゲームをやっているという話も聞くので、生活が乱れている子が増えているのだと思った。家庭では１回３０分しかゲームをしてはいけないと決めてやっているが、相談する窓口や事業所があることがわかったので、何かあったら相談したいと思った。

（委員）ここ数年コロナで気を付けていて、本来業務ができなくて申し訳なかった。今後は皆と連携して、様々なことに関わることができればと思う。心理相談をやっていて、そちらも利用していただければと思った。話を聞くと、家庭が基本ということで、知っている家庭でも父親が忙しく、母親が働きたいけれどもワンオペでみているという形で、頼れる親類や親がそばにおらず、１人で産んでから大変な思いをして、自分も体を壊しそうな状況である。そのような中では、血族や親戚、近所の方の垣根を取り払ってチームでみなければやりきれないと思っている。館山市でも色々な事業をしているが、スポーツや文化芸術をとおしての地域のつながりを展開できれば良いと思った。それには愛情が必要で、館山市に死ぬまで住みたいと思わせるような、誰１人としていじめを作らず、外に出さないようなことが、どこの地域でも必要だと以前から思っている。そのようなことができており、自分たちもその一助として参加できればと思う。

（会長）よく災害だと自助、共助、公助というが、最近は近助といって近い近所で助け合おうという話も出てきている。子育てに関しても、近助や共助といった地域で子どもを育てる、成長させる、育成するということを考えていきたいと思う。

（委員）地域づくり全般という中で、市とかかわっている。本日の会議でコロナの影響は改めて大きいと感じた。また、市との事業では「少年の日つどい大会」で連携をしている。今年についてはモルック大会で、これまではドッジボールをやっていた。モルックをやることで、違った良い面をもった子どもが活躍できるということがわかった。今年もモルック大会になったので、そういった形でも、違ったイベントでも連携をとりながら地域を盛り上げていきたいと思う。

（委員）少年の犯罪の発生傾向となると、そもそも全国的に大幅に低下しており、少年の犯罪件数についてもかなり減っている。しかし、犯罪の傾向が変わっている。どちらかというと直接手を出すという犯罪よりも、最近では大麻に手を染める少年や、特殊詐欺、千葉県警でいう「電話 de 詐欺」で高齢者に息子や孫をかたって金をだまし取ったり、市役所や行政機関を名乗って金をだまし取ったりする組織の末端、いわゆる「掛け子」「受け子」、

金融機関でだまし取った口座から金を引き出す「出し子」等、そのような組織に手を染める子どもが年々増えてきている状況にある。前任署でも１６歳、１７歳、１８歳の子どもたちが、そのような犯罪に手を染めていることが非常に多かった。そのような子どもたちが何が原因かは直接はわからないが、やはり親とのかかわりが小さいころから少なかった子どもが、そのような問題、犯罪を犯している傾向にあるので、親と子と行政が一体となって、ふれあいの場を増やし、心を豊かにしていけば、犯罪もより少なくなると思う。細かい話をする機会は少ないが、このような場を通じて情報共有を図っていければと思う。

（４）その他

５．その他

６．閉会

以上